
トモダチノウタ

薗田 朋子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トモダチノウタ

【Zコード】

Z3236C

【作者名】

園田 朋子

【あらすじ】

山奥の山荘に集まつた仲の良かつた6人の同窓会。それぞれに変わつた10年、変わらなかつた10年があり…。そんな6人の上に時代の急激な変化が襲う。近未来SF。

風が、木々をやさしく揺らしている。重なり合ひ葉の間からダイヤモンドのような鋭い光がまたたく。5月はこの森の家にとつて最も美しい季節だ。暑くもなく、寒くもなく、虫もなく、都会から来る人々にも過ごしやすいだろう。

祐樹は、ログハウスの横に作りつけた丸太組みのテーブルと椅子を拭きながら、今日来る客のことを思つていた。学生時代に同じゼミにいた男女5人。あれから10年。それぞれに違う時間を過ごしてきた。会つのが楽しみのようでもあり、どこかくすぐつたいやうな照れも感じながら。

祐樹は、バンドマンだ。スタジオ兼自宅にはありつたけの楽器と機材を持ち込み、仲間たちと音源を作り、ライブを定期的に行つている。資産家の実家から勘当がわりにもらつた別荘を自分で改築して移り住み、ささやかな菜園を作つて一人で住んでいる。収入は音楽だけではもちろん食つていけるわけではなく、現金収入は専ら肉体労働と趣味が高じてプロ級にまでなつたルアー作りだ。どちらも大した収入ではないが、借金まではしなくてもツアーハンツアーハンとCDを作ることが可能。という程度にはなる。

彼のもうひとつのお仕事は料理。自宅のログハウスは「風月亭」と名づけていて、ときには50人ほどの客が集まるライブハウスにもなる。しかしひょっとしたらメインは彼の作る自家焙煎のコーヒーでもてなしのティーナーかもしれないと内心思つほどだ。

今日の食事は都会からやつてくる友のために、前日に川で釣つておいたハヤの揚げたものに自家製タルタルソース、畑でとれた新鮮なトマトをベースにしたパスタ、天然酵母パンなど。デザートにやはりこれも畑でとれたブルーベリーを入れたシャーベットを仕込んだ。あまりの出来栄えに、本気で店をやろうと思うほどだ。

スタートは18時だが早く来るやつらもいるだろう。祐樹はロン

グドレッドの髪を無造作に時計草の柄の手ぬぐいでまとめて、すりきれた縫の作務衣に汗をかきながら、掃除の仕上げにかかっていた。まだ14時。やっぱり奴らが来る前に風呂こはじっておかねばならないだろ？。

風呂はガスで焚く。沸かすのは男一人暮らしなら面倒だが、やはり今日は特別な日だから仕方がない。みんな泊まつていくだろ？から、風呂を先に沸かしておいとけば手間ないしな。ああ、風呂の掃除もついでにしておかなくては。

食事の支度は準備万端、風呂を沸かしたらやつとひと段落だ。

こんなに何でもできるのに何で俺は結婚できないのだろう、しかし。とつぶやきながら。

車の中で聴いているCDは友である祐樹が作った彼が言つところのジャズのクラブMIX音源というやつ。ドラムンベースというジャンルらしいが、ベースの低音にシャープなドラムと不思議な浮遊音が高音で入っている。普通に会社の友達に「いつも何聴いているの？」と聞かれても答えられないのはそのためだ。

ユカは祐樹のゼミ友だった。何年たつてもお互いの心の距離は変わらない。一人つきりで夜つびて遊んでもぜんぜん男と女の空気にならない。何というか…友達としかいよいのがない。祐樹は大好きだけど、男じゃないのよね。とユカは思う。どっちかというと、子分？？何でもつきあつてくれる。夜、自宅に帰りたくないときはいつもそばにいて話し相手になってくれた。何でも話した。音楽について、芸術について、文学について、哲学について、歴史について、社会について、政治について、家族について、大好きな異性について、etc。お互い、異性の友達が多いっていうのも似ていた。見掛けに似合わず纖細な祐樹と、女のくせに雑なユカ。ユカが散らかしてあるいて祐樹がぶつぶつ言いながら片付けているような、そんな感じ。

ユカは絵を描きながら生活費を稼ぐため派遣社員になった。個展

活動を続けながら昼間は派遣で働いている。仕事は金融事務だ。生き馬の目を抜くような忙しさの中で10年は瞬く間に過ぎた。最近一緒に住んだ男と入籍もした。夫は釣りが趣味の同じ職場のサラリーマンだった。祐樹がルアーを作っているので紹介したら意気投合し、すっかり夫は祐樹のファンになってしまった。夫婦で祐樹のライブに行つたことも幾度となくある。今は家族ぐるみの付き合いである。

今晩は同窓会で祐樹の家に行く、といつたら本当にさみしそうな顔で送り出してくれた夫。彼は祐樹も祐樹の音楽も料理も魚釣りの話も好きだから、一緒に行きたくてしようがないのだ。仕方ないでしょ、お土産にあいつの畠からナスでもカボチャでももらつて帰るから、というと夫は「祐樹君の新しいCDあつたら買つてきて」という。信用されているとはいへ…私がいなくてさびしいんじゃなくて、一人で祐樹に会いにいくのが羨ましいって顔を露骨にしないでほしいんだけど。

祐樹の家に着く前に美喜をひろつていかなければ。子供を産んで少し太つたけど天使のような笑顔をいつも向けてくれる美喜。私の数少ない女友達。

カーステレオから流れる音楽の中にタブラというインドの太鼓の音と鈴の音が加わって、小さな宇宙的なリフレインがはじまつた。祐樹らしい。執拗な完璧さで導かれた音楽。なんて美しい孤独。

「いいこにお留守番しておいてね」と、美喜はベビーベッドで熟睡中のわが子に言った。金曜日のお出かけなんてはじめて。ちょっと嬉しい。産んでからは寝る暇もないほどの忙しさだった。義母が同居する一世帯住宅なので外出は可能だがやはり気が引ける。どんなにいいお義母さんでも他人だ。そつそつ預けて遊びに行けないわ、と思う。

でも、10年ぶりの同窓会なんだもの。うふふ。美喜のふつくらとした頬がゆるむ。みんなどんなふうに年をとったのかしら？それ

とも変わっていないのかしら。

あたしだけが老けてたらビーナスよー。太ったのはショウがないけど。夜の集まりなのが嬉しいわ。あんまり明るいと小じわなんかも目立っちゃうからね。ホテルなんかじゃなくて良かつた。中学の同窓会で、独身でバリバリ働いている人なんかとトイレで一緒にお化粧直したらポーチの中身まで違うわってちょっと驚いてしまつた。あたしなんか、お粉と口紅とグロス、眉かきペンぐらいで。しかもスーパーとコンビニ全部そろうようなの。だつて、何でも子供が一番つなつなやうなもの。いいお化粧品買うつぐらいなりいオムツを買うわ。できるだけ安全な食品を買うわ。マーキュアも毒だからしないわ。だつて、こんな宝物ほかにないんだもの。ああ、女つてこつやつておばちゃん化してゆくのね。それでもいいの。娘の絵美里を愛してるんだもの！

あらあら、したくしなくちゃ。山中のログハウスなんて素敵。せつかくだから、輸入物のワインビネガーと手づくりのなべつかみをおみやげに持つていってあげましょう。祐樹くんたら、見た目はワイルドで落ち武者みたいなのに昔から主婦みたいな会話でもりあがつちやうのよね…。

昭雄はPCのモニター画面から目を離してまばたきをした。仕事のし過ぎで最近、田の前に黒い点がちらつく。このメールが終わったらやつと休みだ。祐樹のやつはいいな。あんな山の中で半自給自足とは。ある意味うらやましい。最初は「貧乏すぎて俺、食べれる草のこと図書館で調べてもう覚えちまつたよ」と笑っていたが、続けるつてのはすごいものだ。やつに言わせると、ひとつの会社に勤め上げるのも十分すごいってな話のようだが。

スーツにネクタイ、は楽なんだよ。祐樹。やつ思つ。だつて、僕は会社員なんだ。会社という組織の中のあくまで一細胞にしかすぎない。個人的な責任はないんだ。仕事はさがさなくとも向こうから降つてくる。地方都市の一企業のサラリーマン。転勤はなく、内勤

のみで、ひたすらPCの中に流れるデータの処理と管理。数字を見ているのは楽しい。達成感がある。やればやるほど結果が出る。成績はきちんと給料に反映される。僕は出世欲はないけど、純粧に仕事が楽しいんだ。そしたら悲しいことも苦しいことも感じないといじやないか。

家に帰れば妻がいる。虐待された子は自分の子を虐待するという説から抜け出せなくて、とうとう子供をつくるにはためらい3年が過ぎた。自活できれば実家には用はない。次に帰るのは父の葬式のときぐらいだろう。僕は父を憎んでいる。それを知っているのは仲が良かつた友人數人と妻だ。

妻は大人しいがしつかりした女だ。2歳上ということもあるが、何をやるにもどしんと構えて僕を後押ししてくれる。母はないが母とはもしかしたらこんな感じなのだろうかと思う。穏やかな家庭、清潔に行き届いたインテリア。六畳一間で3人兄弟と父と殴り合つて暮らした何もかもが嘘のようだ。彼女に会つて僕はこの世に生まれてきた意味を知つた。

だから、僕は働くことを至上のようじとする。当たり前の幸せを知らなかつた22年間への復讐でもあり、慰めでもあるからだ。

車の音とともにシベリアンハスキーの鈴木の声がけたたましく響いた。しまつた、リードを外していたんだつた。祐樹は湯船からあわてて立ち上がつた。入り口にかけておいたバスローブをひっかけると大急ぎで風呂のドアを開けて（風呂は独立した別棟にある）外に出た。けたたましく鳴く鈴木。鈴木という名前はこの高価な犬に対する冒涜だとみんなは言うがなんとなく「鈴木」だと思ったから仕方がない。

「鈴木！鳴くな！おすわり！」といふと鈴木は恨めしそうに耳と尻尾を伏せて鳴きやんだ。

田の前に止まつた赤の4駆から細いジーンズの長い足が下りてきた。

「よつ！貧乏人！元気だつた？」

「久しぶりに会う仲間に言う言葉がそれかよ…桜」

桜、と呼ばれた髪の長い女は、かはは、と笑つて続けた。ああ、その変な笑い方さえしなきやお前も結婚できるのに。といつぐらには美人。

「ほかの人たちはまだなの。つーか気持ち悪いわねえ…。何なのその格好」

確かに、肉体労働その他で真っ黒に日焼けした全身にロングドレッスド、右足にはでっかいタトゥー、耳にはリングピアスが左右三つづつぶらさがつている男が真っ白なバスローブを羽織つてログハウスから出てきたら、ちょっと笑える。

「しょーがないだろ、お袋が送つてきたもんだから。大事にしてんだよ」

「バーカ、このお坊ちゃん崩れが。どうせあなたの実家で、うちのボーヤはお風呂上りはこれじゃないとダメなのよね、とか言われるよきっと。30面下げてかわいらしぃたらいいわね」

「お前俺の飯食いたいなら毒舌なおしてから食え。お前の飯だけ納豆ご飯にするぞ」

といふと、桜は口を閉じた。桜の納豆嫌いは有名なのだ。納豆を目の前で食べてるだけで吐きそうな顔をするのだ。

しかし、笑いをかみ殺したような顔で外の椅子に座つた桜を見て、祐樹は女には勝てんと思うのだった。

「他の連中は仕事もつてる奴ばっかだから遅くなるだろ。桜は何でこんなに早くきたんだよ」

「あーら、ひどい言い草ね。まあ、はじめてくる所だから、迷つて遅刻したら嫌だからさ。それにしても早く着替えていらっしゃいよ。

「男ひでりに肉体美がまぶしーだる」

「ばかじゃないの。あたしが好きなのは痩せたメガネ男なのよ。あなたみたいなマツチヨじや征服感がなくてつまらないわ」

「相変わらず初物食いやつてんのかよ。お前、変わつてねえな」「そつちこそ。あんたが女と歩いているとこ見たことないわよ」「やかまし。ちゃんと俺は囲つてたの。自宅に内緒で住んでたの」「続かないんでしょ」

「う…」

図星を当てられて祐樹はがっくりと頭を垂れる。

スタジオやライブに入り浸り、ろくに勉強や仕事をせず男の世界を飛び回つている男についてくる女は少ない。そして、それが理解できる女（要是はバンドをやつてている女の子）とつきあつても同じジヤンル同士だとお互いのやつててることがライバルで意地の張り合いになつてきて、最後に破局する。

ましてや山の中に引っ込むと出来になくなつてしまつのだ。
「じめんじめん。まあ、今日は皆が集まるのだから、楽しくやうつよ。ね」

なんとなく祐樹は敗北感を抱えたまま着替えに家中へ入つていった。足元を鈴木が長い舌を出してついていく。

「鈴木、俺のことを理解してくれるのはお前だけだ」「などと話しがててしまいながら」

夕日が赤く木々を染め、少し肌寒くなつたころ、コカと美喜、少し送られて昭雄が到着した。既に着いていた桜が料理の準備を手伝い、女三人盛り上がりで他愛もないテレビの話に笑い声を立てている。窓際のソファーに離れて座つてている昭雄のそばに祐樹が座つた。

「なんもないところなんだけど、いいだろ」

「ああ、そうだな。僕、あんまり自然で苦手なんだけど、まだ建物の中は安心するな」

「自然が嫌い、なのか？お前」真っ黒な祐樹の顔が、白く抜けるような肌の昭雄を見て、同じ民族とは思えん、と内心つぶやいた。
「そ。濡れた草の中に足を踏み入れるなんてことは気持ち悪くてできないね。何が出てくるかわからないじゃないか」

「そりゃ? 何が出てきたら楽しいじゃないか。虫が、蛇が、野うさぎか。だいたい山にいるもんは食えるぞ」

「僕はスーパーでパックに入ったものじゃないと口に入れたくないんだよ」

「こいつ、こんな奴だつたなそりゃええ。と、お互に思つ。趣味は正反対。それが、面白くもある。」

「弥は?」と、昭雄。

「連絡つかないんだ。俺あてにメールで出席つて連絡がきたけど。まあ、こんなご時勢だからなあ」

弥は自衛官だった。同じアジアの国から始まつた戦争の影は少しづつ、この国にも忍び寄つてゐる。南の町のいくつかは灰になつた。いつも自然災害と異なるのは、そこに憎しみの連鎖と報復があるから。そして、この国は今、報復論が高まつてゐる。軍拡に次ぐ軍拡。高齢化が進む現代において増税は生活を圧迫してゐる。今は普通の生活ができる。でも、明日は? わからない。

「お前、何でこんなときなのにバンドやつてるんだ?」

何の氣なしに、ふと昭雄は言つ。

祐樹が答える。

「こんな時だからやつてるんだよ。弥もそうだと想ひだ」

「まあ弥、来るかどうかわからんし。飯にしよひば」

昭雄が困つたような視線を祐樹に投げた。

「ごめんな。それは僕だつてそうなのに。おかしなこと言つて悪かつた」

不器用で、言葉で人を傷つけてしまう昭雄。乱暴な父の言葉を隠そつとしても出でてしまつ、それが彼のコンプレックスだった。

祐樹が目を見開いた。

「お前変わつたな」

「そりゃ?」

「そもそも昔は、自分が投げた刃の行き先を考えるような奴じやなかつたんだよ。いい嫁さんもらつたな」

「ううと、祐樹は満面の笑みをたたえた。そう、祐樹は、弥の投げた刃をやんわりと受け止める数少ない友の一人だったのだ。いつも。

「それでは、私たちの再会を祝つて、かんぱーい！」

「つて、何でお前がしきつてんだよ桜」ふてくされる祐樹を尻目に皆、高々とグラスを上げた。

そのとき、バイクの音がした。鈴木もやつぱり吠えてている。「弥」といつてすっかり始まる前から酔っている桜がもつれる足で迎えに行く。

身長185cmの弥が、白いTシャツにジーンズといったごく普通のいでたちで入ってきた。しかしその胸板といい刈り上げた頭といい、スポーツ選手かレスラーかといったところだ。

「おおー弥！元気そうじやん。」と祐樹。

「ああ」と弥。笑うと意外と優しそうな目が、かつて彼を在学中もてさせたチャームポイントだがあまり変わっていない。すこし目元の皺が増えたかな、というところ。

当時から逞しい体で、ラグビーをやつて全国大会までいたらしいが、クラスメートながらそれほど成績のことはよく知らなかつたし、特に彼の方から自慢することもなかつた。赤点が多くて、皆から試験前にノートを借りまくつていた大人しい巨人、というのが弥だった。

「しかし、僕と違つて好戦的な性格でもないのによく自衛官に」と昭雄。

「大卒だし幹部なんだろお前。後輩とかになめられていいか？」
これは祐樹。

「ああ。まあな。逆に楽だけどな。規律がきつちりしてるから。俺、腹へつてんだけ飯ある？」

「まかせとけ。まだ始まつたばかりだよ。桜、弥のぶんもよそつてきて！」

「だめよ、祐樹君。桜ちゃんたらもうただの酔っ払いよ。あたしが

やるわ」と美喜がいそいそと厨房へ引っ込んだ。

そう、この6人は学生時代しょっちゅうつるんでいたのだ。阿吽の呼吸で飲み会を仕切りそれが役割を分担していた。何か特別に集まるわけでもなかつたが、学食や試験前などは自然に顔を合わせ遊んでいた仲間だつた。

しばし料理に舌鼓を打つ。

そして全員の酔いも進んだころ、ユカが尋ねた。

「弥君、最近仕事どう?」

「ああ、俺…」

「」もる彼の顔に一同の目が集まつた。

「実はさ…もう人殺すのが嫌になつちゃつてさ。やめてきちゃつたんだ」

「ええ?」尋ねたユカも驚いた。

「マジで?」と祐樹。

「…」思慮深い目で無言で頷く昭雄。

弥の目にうつすらと光るものがにじんだ。

「毎日、泥にまみれてさ、戦争の準備してたけど、誰も本当に戦争が始まるなんて思つてなかつたろ。正直、大地震のときや水害なんか、すげえがんばつてさ、人助けをしてさ、俺なんかちっぽけな自衛官だけど、それでも誇りに思つてたんだよこの仕事。だけど…。どんなに銃の訓練したつてさ、使う機会来るとは思わないだろ。ましてや専守防衛なのこの国は。攻めちゃいけないの。陸自なんか使われる日が来るとは夢にも思つてなかつたんだよ。ましてや地上戦があるなんてことは…。常に備え、だつたの俺たち。でもそれが幸せに思える日が来るなんて思えなかつたんだよ…」

弥は最後まで言うと肩を震わせた。祐樹は、じつがこんなに話すの初めて見た、と思つた。

「だから、自分で撃つたタマで人が死ぬとかさ、タマが飛んでくるとかさ、そういうのつて夢物語だつた訳じやん。そりやあ、隊では有事に備えよつて言わってきたけどさ。実感としてないでしょそう

いうの。何十年この国が戦争していないと思つてんだ。つてね。俺は大卒だけがとりえあんま氣もきかないし頭もあんまりまわらないけど、自衛官なら父ちゃんも兄ちゃんも、爺さんもひい爺さんも軍人の家系…だからな。ずっと、自衛隊員になるのが普通の環境だつたわけ。で、こないだ有事があつたでしょ。機密だから詳しい内容は言えないけど。俺、殺したんだ。敵兵を」

祐樹が弥の肩を抱いた。女性3人は息をつめて言葉をなくしていた。

昭雄が煙草に火をつけた。

「それで、お前、抜けてきたのか？」

「実は、逃げてきちゃつたんだ。昔と違つて大した罪にはならないけど、一応、犯罪だよ。でも、俺、気づいたんだ。撃てば、人が死んでんのに、手柄になるわけだろ。で、ゲームみたいに気持ちよかつたんだ。どんどん撃てば倒れていく。俺を殺そうとしてる奴らを倒す。それに気づいたら、遮二無二逃げるしかなかつた。後は、肉体労働を転々として暮らしてた。一応パソコンのフリーメールだけ開けといて隊の仲良かつた奴にだけは教えといたから、それで今日の事知つて、来たんだ。逃げたのは俺だけじゃない。結構いると思つ。生活の為とか、金ためて店やりたいとか、借金返したいとかそういう理由で隊にいる奴もいるからね」

しまいまで語つと弥はグラスのワインを一気に空けて、そのままふらふらと窓際のソファへつづつした。酒に弱いのは直つていないう�だ、

「ばかねえ、この子には向いてないと思つたのに。だからやめなさいつて、言つたのに。それが理由で別れたのに」と桜はソファーのそばの床に座つて弥の坊主頭をいとおしげに撫でた。真っ赤に塗つた爪にラメの星が輝く。

「あんたたち、つきあつてたの？」とユカ。

「お前、弥が隊抜けてきたつていうのより驚いていないか？」と弥が言つて一座が爆笑した。

ふふふ、と大人の笑いで桜が応じた。

「内緒だつたの。あたしは一人の男で満足できる女じやなかつたし、当時から。彼ももててたけど。つきあつてたつていうんじやないけど、まあ男と女だつたのよ。昔のことだからねえ。」

「弥君、ひとりなんでしょ。桜ちゃん、弥君と今ならやりなおせるんじやないの？」とふつくらと笑う美喜。

「あたし、会社を作つて立ち上げたばかりよ。スキヤンダルは困るわ。ま…、刑務所に行つて帰つてきてこいつがあたしのことが好きだつたら考へてもいいけど、それはどうかなあ。終わつたことなによ。男は生活のスパイズだけど主食じやないのよ、あたしにとつて「分かる! 分かるぞ桜。所詮私ら美喜みたに子を産む女じやないのよね!」とユカ。

「まあ、差別だわ。あたしもせめて仲間にいれてよお」と美喜。

桜が首をかしげた。

「あらやだ、あたし息子がいるのよ。もう5歳よ」

「はあ?」と何故か祐樹が大声を上げた。

「お前、こどもいるのか!? そんなこと知らなかつたぞ!」「やーだ、無粋だから友達に言つわけないでしょ。あたし一人の子よ。すつごくかわいいわ。アメリカ人とのハーフなんだけど、今子供モデルをしているのよ。だから子供服の会社作つたんじやないの。子供いないで子供服なんかデザインするわけないでしょ」

これには一同啞然とした。長いつきあいでそれぞれに交流があつたのだが、子供のコの字も会話に出てきたことがないのである。

「結婚はしなかつたわ。相手が死んだから。5年前、あの戦争のときには。たまたまであつてね、結ばれたんけど。認知する暇もなかつたわ。でも、素敵なプレゼントを置いてってくれた。尚弘つて名づけて、大事に育てるわ。だから私、結婚はしないの。男は尚弘だけで十分」

昭雄が複雑な感情をおさえた彼独特の無表情で、言った。

「桜、それで…大事について、それは大事にしてあげてるか

「しててに決まってるじゃない。あたしは水商売やってる母親に殴られたり階段から落とされたり、三番田のお父ちゃんにぶつ殺されそうになつたり、しまいにや親戚のとこに預けられてそれつきりになつちやつたけど、だからこそ、よ。お母ちゃんになかつた分の母性が、あたしに恵まれたのかしら。かわいがりすぎるよくないかもしれないけど、自分の分身のように好きで好きでしかたがないの。ほら、見て」

「写真がヴィトンのバッグから大事そうに取り出す。その目は美しく潤んでさえいた。

茶色の巻き毛の活潑そうな少年が笑つてそこに映つっていた。母ゆずりの負けん気と勝負強さをこの子がうけつぐのなら、世の中を逞しく渡つて行けるだらう、と一同に思わせた。

なぜか安堵した表情を見せる昭雄にいやつと祐樹は笑つて見せた。

「一本くれよ」

「お前、やめたんじやなかつたのか」といしながら昭雄は祐樹に煙草を箱」と投げてよこした。

「今日は解禁なの」

「悪趣味な奴。笑うなよ」

「お前、そろそろ子供つくれよ。お前の子供の顔も見てみたいよ」「できても祐樹には見せたくないなあ」とつんと昭雄は返した。「だつて、変なばい菌つけられそудし」「つけねえよ。と憤慨する祐樹。

「一体なに言つてるのかしら、あの一人?」とユカは首をかしげた。昭雄の家庭の事情をよく知つてゐる桜はそれでも「さあ?」ととぼけた。

と、突然、空が明るくなつた。オレンジ色の光が一瞬暗闇を昼間に変えた。

激しい雷の落ちたような音がつんざき、地面が揺れた。それと同時に電気が消えた。

幸い、キャンドルをたくさん持っていたため真っ暗闇は免れたのだが。

「とうとうこのちかくの町でも始まつたのかしら」と美喜。「こわいわ。うちが心配」

突然、戦争は始まつた。何の前触れもなく。前触れはもしかしたらあつたのかもしれないが、国民には知らされなかつた。

「今日はこれでお開きかな。片付けは明るくなつてからでいいや。皆、動くと危ないからここに泊まりな。寝床はこの建物の二階に二部屋あるから、女性はその客室の一室ベッドと俺の寝室に寝てくれ。野郎共は一階でザコ寝な。毛布はあるから自由に使つてくれ。家族と連絡を取りたい奴は一応自家発電を使えばネットも電話もつながるから言つてくれ……ああ、携帯でいいのか。じゃ、そんな訳で落ち着いて行動しようぜ。じゃあ一旦解散つてここで

「祐樹、へんだよ。あんた。解散つて」と、コカ。

「そお?」

「それより、祐樹。お前大事なこと黙つてるだろ」と昭雄。
「何だよ」

「突然、同窓会はがきなんか出しちやつて。集まる理由、あつたんだろ。でも弥があんなこといいだしたから、僕らに言い出しつくくなつたんだろう。言えよ、てめー、水臭いぞ。俺のこと知つてて、てめーだけ自分のこと言わねえなんておかしいだろ?がよ!」

元来、昭雄は喧嘩つ早いのだ。もう言葉と田つきが変わり祐樹の胸倉をつかんでいる。

「あ……」と美喜が声を出した。

突然、電気が点いたのだ。どうやら危機は一旦去つたらしい。長距離のミサイルが最近よく打ち落とされているが残つた破片でも落ちただけだったのかもしれない。

「実はさ、俺んとこに赤紙来たんだ」
ドレッドの頭をぼりぼりとかきながら祐樹が言った。
一同は絶句した。

「それって…あの、最近決まった動員制度の話」

「そ。無職の人やよくわからん仕事の人、独身の若い人は戦争に行きましようつて奴。これが意外と国民の義務だつたりするからな。」

「そんな…そんなのダメよ」桜は昭雄を押しのけて祐樹にしがみつくように抱きついた、

「行っちゃダメよ。あんただけは。平和のことを誰よりも想つていたあんただけは。あたしは遅かったの。彼が死ぬまではテレビの中のことだけだと思っていた。そうして他の国の事なんか知らずに、外国で作った肉や野菜を食べて服を着て暮らしてた。だけどあいつが死んでから気づいたの。残されていく気持ちを。人が人を憎しみもなく殺していくことを。あんただけは行っちゃダメよ。いいうちに生まれて、きれいな事言つてきれいなところに住んできれいな物たべて、いい音楽だつてまだまだ作れるのに、あんたみたいな人がいないとダメなのよ！」桜は震えながら泣きだした。

祐樹はぼんやりと、桜のことをこいつ、やっぱりいい女だな、抱いとけばよかつたな、と思つた。

「そりゃあさ、俺はバンドマンで、やっぱ音楽で平和を伝えていくのが仕事だと思ってやつてきた。でも、戦争が始まつたときに、始まつたつて時点で俺の負けなんだ。止められなかつたんだから。一発の弾が町を飲み込んでいく様をテレビで見た。もう、それだけで俺の負けなんだ。すつごい悔しいけど。俺はベースマンだから歌は歌えない。それでも音でメッセージを伝えられると思って、色んな国の楽器とセツショソンしたりその音源売つたりしてさ、金にもならねえけど何とか伝えようとしてきた。言葉じゃなくても気持ちよくなれるつて事を。でも、爆弾は落ちたんだ。それで。俺の中で何かが変わつた。始まつたもんを止めることはもうできないだろう。俺の力は小さすぎる。そして、何も知らないことに気づいたんだ。俺は戦争は大嫌いだ。でも、何も知らないんだ。だから行つて、見てこようと思うんだ。弥が見てきた地獄。それがやっぱり悪だと思うなら、何とか生きて帰つてきて、それで本当に音楽をやりたい。そ

「が、俺の今日言いたかったことだ」

弥もいつのまにか起きていて、皆が固睡をのんで祐樹の言葉を聞いていた。祐樹はいつでも6人のリーダーだった。彼がこうと決めたら、その決断は絶対だった。皆はそれを知っていた。

美喜は「桜ちゃん」と、桜を促して寝室に上がつていった。昭雄と、弥と、祐樹、そしてユカがその場に残つた。

「昔も、この4人で祐樹の部屋で麻雀やつたよね。全員ルールもよくわかつてなくてさあ」

と、何事もなかつたかのようにユカが言つた。

「そうだな。まあ、僕の一人勝ちだつたけどね」と昭雄。「だつて、

皆顔にすぐ出るから分かりやすいんだよね」

「悲しいのは皆文系だから、計算にめっちゃ時間がかかつてさー」と祐樹。

彼らは哲学の徒であつた。現代哲学というものを学んでいた。デカルトの和訳を行一行やつていた。睡とぼしあつて討論した。それも、遙か、遠い。

「ギター弾いてよ、祐樹」とユカ。

「えー、言つとくが俺ギターも上手いんだよ」

「えー、じゃねえよ。じゃあ、昭雄が歌つて。昔みたいに」ユカが笑つた。

道端で、祐樹がギターを弾いて、昭雄が歌つて、一晩中その前でユカが座つて過ごした夜があつた。寒い夜を缶コーヒーだけで暖めながら、ストーンズを、ジョンレノンを、ボブマーリイを歌つた。祐樹がアコーティックギターを多彩に操り、昭雄が意外な美声で客を集めた。目の前に置いたギターケースには千円札が降つてくることもしばしばだった。時には部活帰りの弥も道端に座つた。何もなくて遊んだ日々。戦争がはじまるなんて思わなかつた10年前。歩いている米軍に「日本には戦争はいらないから帰れ!」つて英語で怒鳴つてつかみ合いの喧嘩になつたこともあつた。外の有名ミュージシャンがふらりと現れて一緒に歌つたこともあつ

た。

祐樹がギターをかき鳴らし、昭雄が歌つた。昭雄は少し下手になつていたけど、それでも道で歌つたたくさんの曲を、ふたりとも何一つ忘れてはいなかつた。親指で低音のビートをとりながら他の指で高音のメロディーを奏てるブルースギターの祐樹と、明るい音質でクールに歌う昭雄の二人。学内で、公園で、路上で、彼らは仲間のヒーローだつた。

弥と、昭雄はいつしか寝てしまつた。ユカと祐樹は森に差込む朝日を見ながら外のテーブルに一人で座つてコーヒーを飲んだ。祐樹の傍らには鈴木が眠つてゐる。

「何か変な晩だつたねえ」

「そうだな。片付け手伝つていけよ」

「うん」

「旦那は大丈夫だつた？」

「うん、うちも旦那も大丈夫。何だか海の方に落ちたみたい。停電は電力会社が国の命令で強制的に落としたみたい。人的被害はなかつたそうよ」

「そつか

「あんたが行つてしまつの寂しいな

「ありがと」

なんとなく、憎まれ口も叩かずに、一人はそれから向かい合つこともせず、朝靄に淡く溶けた森を見ながら、鳥たちのさえずりを聞きながら、ゆつくりとコーヒーをのんだ。まるで時が止まつてゐるかのようと思われた。こんなふうに、話す日が来るのは、思わなかつた。とふたりともがそう、思った。

「それじゃ、元気でな」と祐樹が言つた。

弥はしばらく落ち着くまでこの家に逗留することに決めた為、あの4人だけが帰ることになつた。

「あのね」と

美喜が言った。

「桜ちゃんと昨日話していくて思つたんだけど、10年後に、またこの場所で会わない？」

この国が、人が、自分たちが、いつたいどつなるかまつたく見当もつかない、未来。

「そうだな」と祐樹が笑つた。

「じゃあ、10年後に」とそつけなく、昭雄は去つていつた。振り向くこともしなかつた。

「じゃあね」

「又ね」

「ばいばい」

来たときと同じ、ユカは美喜の車に、桜は自分の車に乗つて走り去つていつた。

木々の上に、初夏の風が吹きはじめていた。太陽がまぶしい光を放ち、雲のない、空が森の上に広がつていた。

(後書き)

読みかえしてみると、なんだかどつても実話を多く入れちゃった感が…。年をとつてよかつた気がします。たくさんの人にもぐりあい、いろんな種類の仕事をして、やつとリアルなお話を書けるような気がします。書いていてとても楽しかった。小説を書くのもほとんど10年ぶりぐらいだったので、この自分自身の10年への整理のような気持ちがいっぱい入っています。

もちろん、実在する人々や経験したことはもつともつと強烈ですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236c/>

トモダチノウタ

2010年10月8日12時58分発行